



OKASHI  
LOVERS







# まえがき

はじめての方ははじめまして。そうでない方はこんにちは。  
今回はページの都合で、あとがきならぬ前書きとなりました。  
入稿限界まで後3時間となり、やっとこの文章を書いております。  
突然のFF本ということで、なかなか試行錯誤しましたが、  
とりあえず本にすることができました。  
ファリスにしても、まだまだ描きたいことが色々あるので、  
今後もこのジャンルについては続けられればなあ、と思います。  
FF7のティファとファリスで二大勢力ですね。  
ディンディアが楽しみです。  
そんなこんなで、今回はこの辺で。それでは。

# 奥付

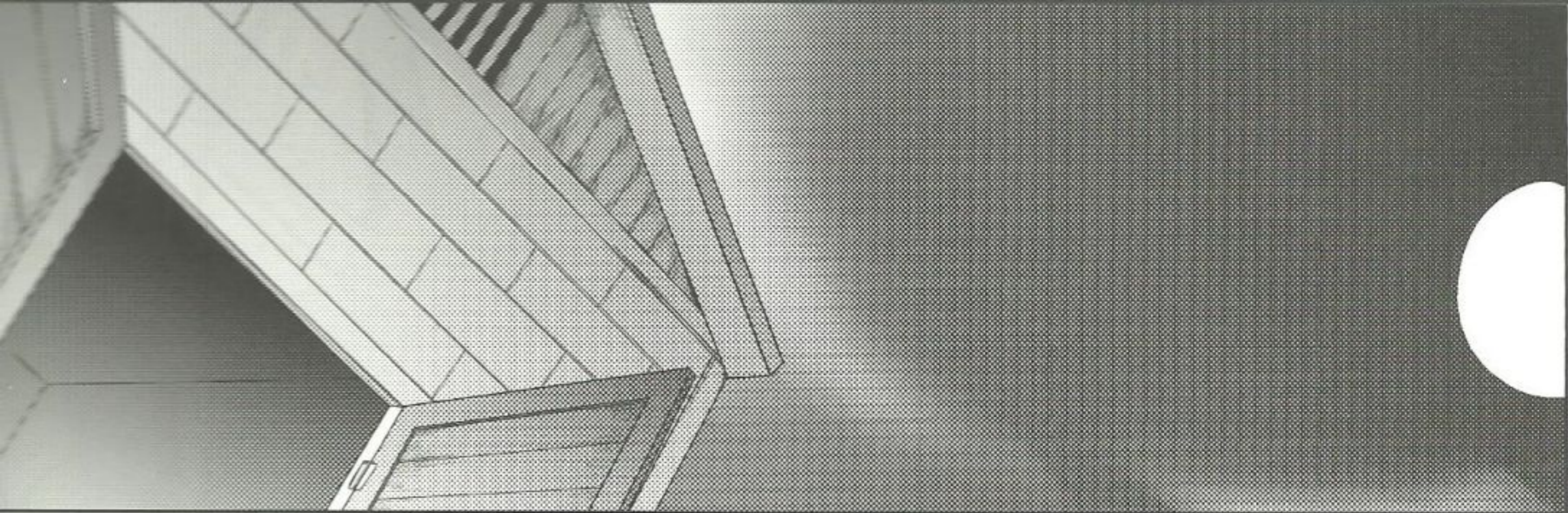
誌名	: OKASHILOVERS
発行者	: 寒天
発行サークル	: 寒天示現流
発効日	: 2010/12/31
印刷所	: くりえい社様
WEB	: <a href="http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/">http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/</a>

※18歳未満の方の購入を硬く禁じます。

# OKASHILOVERS

---





今日もこんなに汚れちゃって  
海賊稼業も楽じゃねえや

結構ニオうなあ……



ふっ



ふっ!!



生きるためには  
仕方ないとはいえ……

やっぱ気だ  
なっちゃうなあ



おかしん

大好きだア

なつ

おまつ  
何言つて……

4fツ

それより  
出てけツ

ムニツ♥

おかひら……  
らいすき……れす

……お前  
酒臭いぞ

そんなこたあ  
あーせんツ

シエツ

もういいから  
休めよ……





本気で泣い

Hi.....



休みません！  
それよりおかしら.....  
大好きデス！

キラ



ツーカーぶつちやけ  
おかしらで毎晩  
抜いてますし

ポッ



当然ツスよ！



お.....おまっ  
正気かよッ

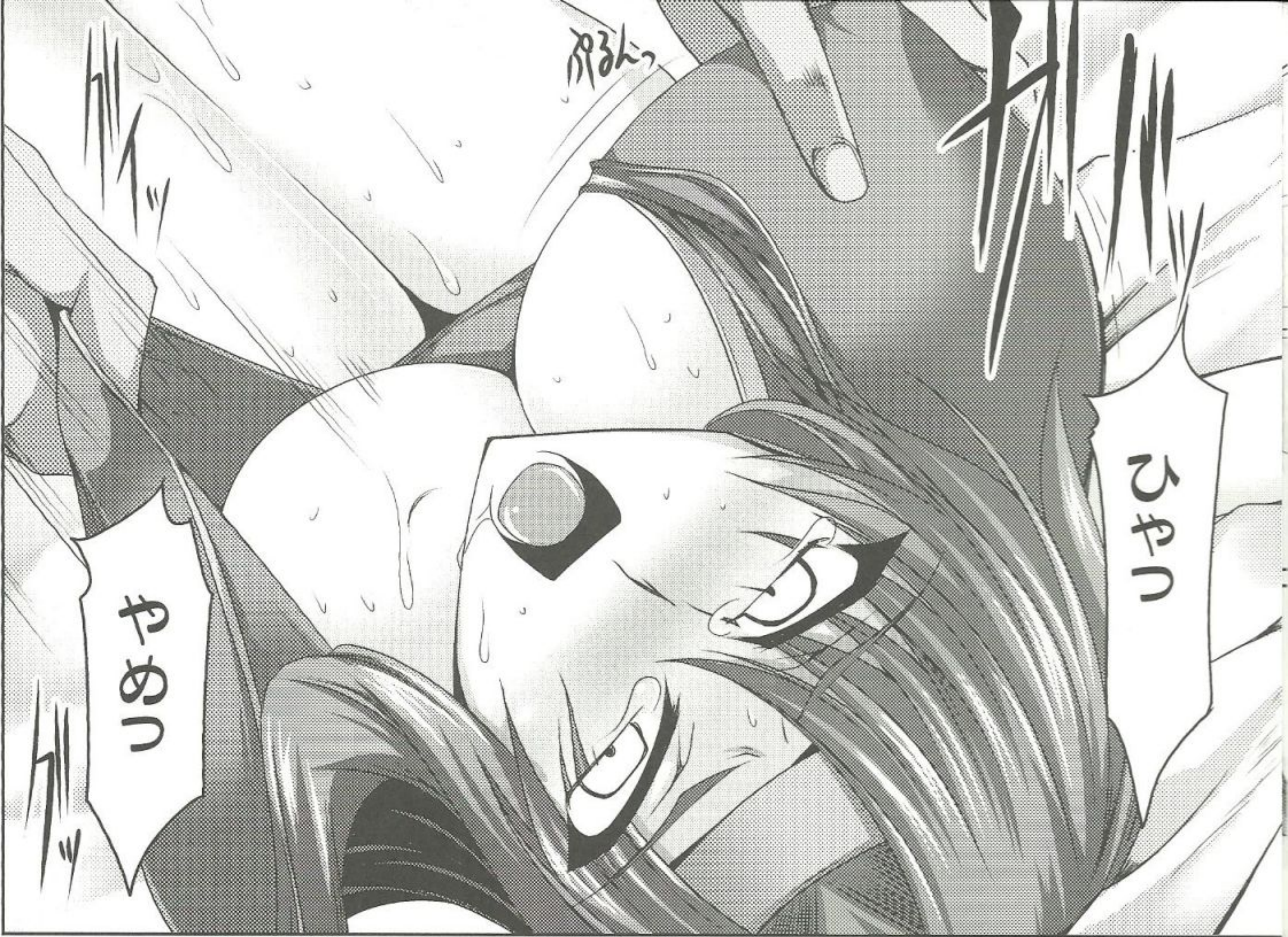
ツーカーぶつちやけで毎晩抜いてますし

正気かよッ



うえええええッ





フ&N

フ&N

フ&N



フ&N

フ&N

フ&N



フ&N

フ&N

フ&N

フ&N



バカッ  
やめろよ

フ&N

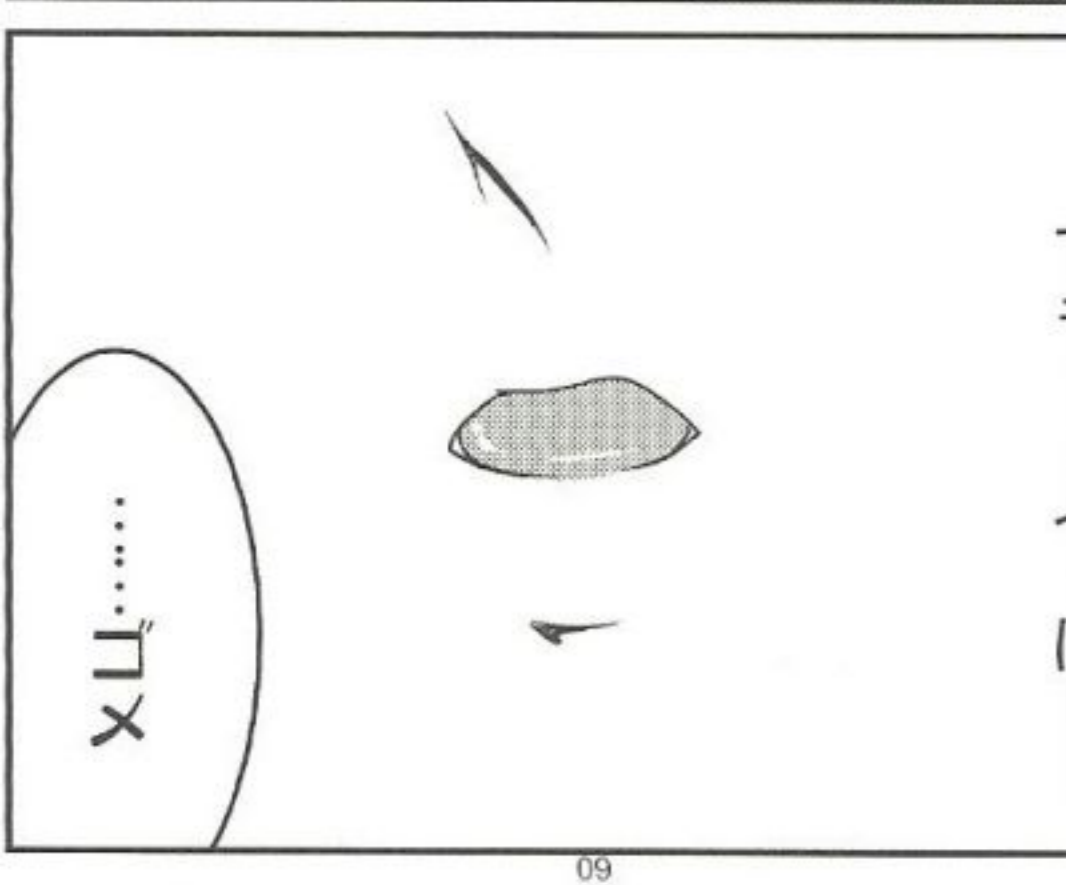
フ&N

こんなの

フ&N

フ&N









くまの

な……なんで  
いきなり……  
キスして

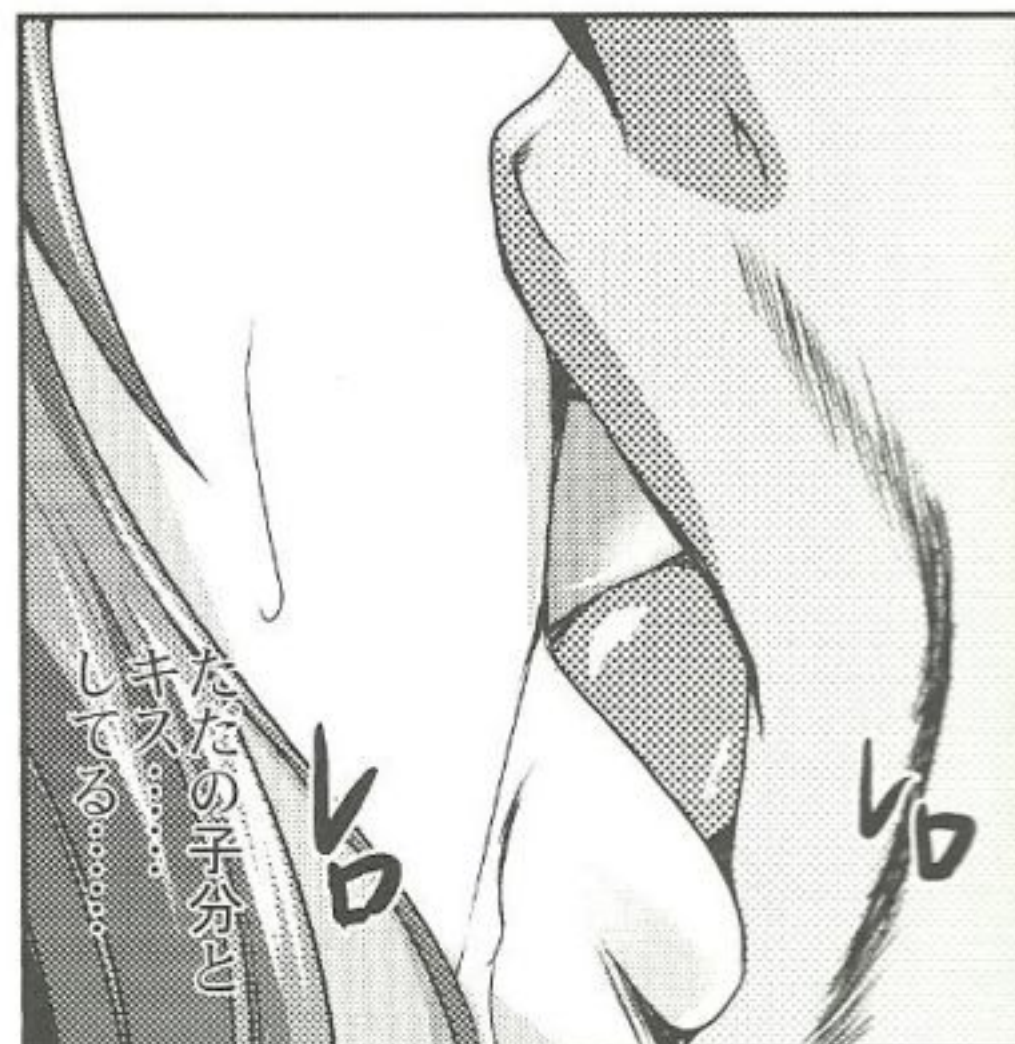


おかしらあ

おかしらの身体……  
もっと触らせて  
くださいよオ



抵抗……  
できない？



ただの子分と  
キス……  
してる……



こんなこと無理やり  
されてるってのに……

俺が……  
こん……



むわぁ♡

はあ……  
おかしらの腋

ホワッ

いいニオイ  
だあ

るぎんんん

んんん

る

おかしらの腋  
タマンねエ……  
汗臭くてツンとする

おかしらの  
ニオイ……  
たまんねえ

やめっ  
匂いなんて  
嗅ぐなよオ

ん

ん

エロすぎだよオ

ふあふあ  
ににに

嫌ッ……

んんん

るぎんん

ににに

ダメだよ  
こんなの……ッ





ねえ……  
おかしらア

ガマン  
できねエツス



ひあッ



俺……もう

おかしらが  
エロすぎて……



や……  
やめろッ

そんなの  
コッチ向けるなアッ





おかしらっ

ばかッ  
何やって……

待ッ

はあッ

はあ……

んぐおおッ!?

おろッ

すみませんッ





息がッ



おかしらのクチ……ッ  
最高だアッッ



うおお……ッ



チンポが……  
ノドを突いてッ

ッ

ッ

ッ

ッ

気持ち……いい  
……なんてエッ

ッ……GUM





もう……  
射精るッ

ほわわ



か  
ら  
ら  
ら

んぶきッ

おかしら……  
おかしらあッ



ん  
ぶ  
き  
ッ

ん  
ぶ  
き  
ッ

ん  
ぶ  
き  
ッ

ん  
ぶ  
き  
ッ





こんなエロい  
おかしらを見せられたら……

俺  
もう……ッ



なッ……  
何言つてんだよ……

もう気は  
済んだだろ……!?



おかしらッ  
クチだけじゃもう

満足できねエ  
ツスよオ……

シズ

シズ

ドン





バカあ……ッ  
ホントに……ッ



や……やめッ

そんなの  
コツチに……ッ



ひゃあああッ



つておまッッ  
きた 汚ッ

そこはッ  
違……違うからア





うおおおっ  
スゲエ!

おまおま



おまおま



おかしらの尻穴ツツ  
スゲエ締め付けてくるツツ

いくらでも搾り取られ  
ちまうよオツツ

おまおま

おまおま



おまおま

おまおま

おまおま

おまおま

















お尻にこんなに  
射精したら……

ああ  
ああ  
ああ

お見て孕んじやう  
ヲオ……♡

はあ……また……  
こんなじ……い

……このお尻

ぬほお





ま……  
まだ続けるのか……？

これ以上やったら  
せり後戻り  
してはくなん……



おかしらが  
綺麗にして  
くださいよお

はあ……はあ  
こんなに  
汚れちまった……



またビクビクして

お尻の穴が  
緩む……

おかしらアッ！

うううッ

びびッ



結局  
シちゃってるし……

ビク

ビク

んっ

はあッ

あんなに射精  
したのに……

まだこんなに……  
ガチガチなのがよオ

ビク

はあ

びびッ







オィ

おかしら



おはよう  
ございます！



お……  
おはよう……

いやーしかし  
昨夜はおかしな夢を  
見ちゃったぜ。

何故か俺がおかしらと  
セックスしててさ  
しかもおかしらが何故か  
女の子なんだよ！  
……俺ちよつとゲイツ気  
あるのかなあ……

テメエ  
何羨ましい夢  
見てやがるんだ！

人の気も  
知らないで……ッ



今日も仕事だッ

ホラ  
お前ら

いつまで  
バカ話してんだ！

四十秒で  
支度しな！

Fin



# FINAL FANTASY

【ミノタウロスのサリサ】

by 忌呪

自分は敗者だ。敗者である以上、勝者には従わなければならぬ。人間が相手であるにせよ魔物が相手であるにせよ、自身だけ男勝りであろうが女という性から逃れる事がかなわぬからには、海賊の頭領を務めていた頃から必然としてその手の凌辱もあるものと想定はしていた。

しかしファリスには誇りがあつた。ただ女という性だけを欲するような下衆な輩に穢されるくらいなら、舌を噛むなりして自ら命を絶とう、と覚悟を決めてもいたものだ。自分一人の命で済む問題であるならば、今回のコレもそうしていただろう。

「ん、く……ち、畜生……ッ」

「やれやれ、ヌルイな。そんな程度ではいつまで経ってもイけやせんぞ。真面目にやっているのか、うん？」

屈強な男の腕ほどもありそうな肉棒——否、肉塊をファリスの胸に挟み、扱かせながら、ミノタウロスはそう言つてモーニングスターを気絶しているバツツの頭に押し当てた。

「これではやはりこいつには死んでもらうしか無さそうだな」

「ッ!? や、やめろ! ……もつと、頑張るから……!」

ミノタウロスの牛面が愉悦に歪む。肉棒も醜悪ならその持ち主も吐き気を催す醜さだ。が、その巨軀に秘められた暴力は屈強そのもので、このフォークタワーに封印されし二大魔法がうちホーリーを手に入れんと最上階まで登ってきたバツツとファリスは敗北を喫してしまった。

二人の力は決して低かったわけではない。クリスタルに選ばれた者として、今までも幾多の困難、様々な強敵を打ち破り、ここまで来たのだ。

だが、その力の殆どは魔法に依るところが大きすぎた。

魔法を使用することの出来ないこの力の塔で、今まで魔法にばかり頼って冒険してきた二人は当然のように苦戦を余儀なくされた。慣れない戦士系ジョブでは満足に力を発揮することも出来ず、

その事をどれだけ悔やもうとも全て後の祭りだった。

敗北した二人を睥睨しながら、ミノタウロスが持ち出した取引は単純そのもの。千年の長きに渡り封印されてきた自分の性欲の捌け口となれ……ただ、それだけだった。

（クソッ! バツツの命さえ懸かってなかったら、こんな奴のクソチンポ、今すぐにも噛み千切つてやるのに……!）

チラ、と横目で一瞥したバツツは、倒れたまままだ目覚めそうな気配は無かった。ファリスを庇い、ミノタウロスの渾身の一撃をまともに喰らってしまったのだから無理も無い。

（俺のせいで……バツツ……ごめん）

涙が溢れそうになるのは、そんな不甲斐なきのせいだ。決して今のこの状況を女として怖れ、厭い、脅えて泣きそうになつていくわけではないのだと自分に言い聞かせる。

「クッククク。千年ぶりの雌はやはり、いい。……お、お。いいぞ、もつと、もつと強く挟んで、扱け」

「く……ん、……ふ、くう……はあ」

愉悦に浸るミノタウロスを見上げ、忌々しげに乳房を押し両手に力を込める。激しく反り返つたミノタウロスの剛直は少しでも挟む力を緩めると胸の中から逃げ出してしまい、その度にこの牛頭の魔人はバツツへと鉄球を突きつけるのだ。

「その調子だ。ただ大きいだけでなく、ハリ良くきめ細やかな、最高の乳だ。お前達がこの最上階に現れた時から、狙つておつたのよ。おかげでこんなにも滾っているわ」

（クソッ、馬鹿みてえに膨らませやがって……しかも扱くたびに、まだ大きく……太く、硬くなつてく、みたいだ……）

ミノタウロスの背丈はバツツやファリスの二倍近くもあるのか。が、その股間に隆々とそり勃つ獣欲棒は体格差を考慮してもあまりに異常なサイズだった。

陰茎は先述の通り男の腕、それもファリスの子分の海賊達の中で最も腕力に優れた男の腕と同程度はあり、歪に節くれたそこにはゴツゴツとしたイボと、これもまた野太い血管が大木に絡み付く蔦のように浮き出、激しく脈打っている。

（それに……何なんだよ、この……こいつの……先っぽ）

# THE MINOTAUR'S SARISA



# FINAL FARI FANTASY

龟头はまさしく肉の凶器と呼ぶに相応しいモノだった。自分達を圧倒的な力で薙ぎ払い、殴り倒したモーニングスター。その先端についている鉄球にも似たそこにはファリスの口並に大きな尿道口がパツクリと坑を開いていた。

(デカイ……ホントに……化物だ)

何もかもが人間の規格とは異なっている。魔物の雄をこうして目の当たりにし、ファリスは苦しげに呻いて顔を背けた。

(臭い……汚い……)

千年の封印中、ミノタウロスの肉体が代謝していたのかどうかはわからない。けれど老廃物はしつかりと肉棒にこびり付いているようで、乳房で扱き上げるたびに腐肉の匂いがファリスの鼻腔へと流れ込み、犯してくるのだ。

「おい、顔を背けるな。もつと鼻を鳴らして、犬みたいにイチモツの匂いを嗅ぐんだ」

「そ、そんなこと……!」

出来るわけがない、とは言えなかった。ミノタウロスが少しでも豪腕を振るえば、バツツの頭は鉄球に潰されてしまうのだ。

魔物の肉棒に顔を寄せ、その饅えた汚臭を嗅がなければならぬ。屈辱にファリスはギリツと奥歯を噛み締めた。死んでしまいたい、が……それは逃避だ。バツツを見捨てることだけは、ファリスにはどうしても出来なかった。

「……わかった。嗅げば、いいんだろ」

背けていた顔を正面へと戻し、改めて、胸に挟んだミノタウロスの獣棒を見る。乳房からはみ出したそれは大きく波打ちながら、早く嗅げとファリスを急かしているかのようだった。

(嗅げたって、どうすればいいんだ……)

ミノタウロスを満足させるためには、なるべく下品に、彼の加虐心を満足させてやる必要がある。そのためファリスは暫しの逡巡の後、言われた通り犬のようにスンスンと鼻を鳴らし、汚臭を鼻腔いっぱい吸い込んでみた。

「うっ、……ぐ、ぶ……うええ……ン、スン……ウ」

(臭い、臭い臭い臭い臭い! なんだよ、なんなんだよこの匂い……う、クソツ、クソオ……)

あまりの臭気に、ファリスは激しい吐き気と頭痛に襲われた。

磯で嗅ぐ腐った海産物よりもなお酷い匂いだ。畜舎に溜まった糞尿がおそらくはこのような匂いではないか、と思う。嗅いでいるだけで脳が直接痛めつけられ、壊されていくかのような、そんな事をファリスは錯覚しながら、それでも耐えた。耐えて、ミノタウロスを満足させるため下品に鼻を鳴らし続けた。

(こんなの嗅ぎ続けてたら、頭がオカシクなっちゃう……畜生、この牛野郎……絶対、絶対に……殺してやる……バツツを助けたら、今度こそ、……う、……ううげえ)

「どうだ、チンポの匂いは気に入ったか？」

「誰が……気に入るもんか、こんな……!」

せめてもの悪態を遮るように、ミノタウロスは腰を突き入れ、ファリスの鼻へぶつけるように龟头を胸の谷間から押し出した。

「ふぐっ!?」

鼻先スレスレ、悪臭の元がこびり付いた恥垢ごと迫る。目を白黒させ、嗚咽しそうになりつつもファリスはグツと堪えようとし、

(……あ、あれ……?)

微かな違和感に気付いた。

吐き気がするのも目眩がするのも変わらない。気持ちが悪くて目の前の醜い肉棒を叩き潰してやりたいのに、いつの間にか、意識せずとも身体は勝手に鼻を鳴らしていた。

(なんだよ……これ。なんで、こんな臭い……獣の、チンポの匂い……自分から嗅いでるんだよ、俺……?)

おかしい。そんなはずはない、と思うのに、眼前に迫る化物龟头から目を離せず、顔を逸らせない。

「逆らえないのが不思議なようだが、それは当然のことだ。お前が雌である以上は、肉棒には逆らんのよ」

「ば、馬鹿げた……こと……言うな……あ」

「本当に馬鹿げた事だと思うか？ 信じられんのなら、もつと匂いを嗅げ。頭の中をチンポの匂いで満たし、龟头に口付けて舌を這わせてみる。それでも我慢出来るようなら……いいぞ。お前の言うこの馬鹿げた事は、もうやめてやろう」

牛面の魔人が嗤う。

# THE MINOTAUR'S SARISA



# FINAL FARIS FANTASY

「本当……だな？」

その挑発自体、どうかしていた。このまま悪臭を嗅ぎ続け、亀頭に口付けして舌を這わすなど、嫌悪すべき事柄以外の何物でもない。それでもバツツの命が懸かっているからにはやらなければ、やっつて耐えれば済むことだ、とファリスは己を鼓舞した。

(やっばり……臭い……チンポ、臭い……よお)

ツンと染みる匂いに涙を滲ませながら、胸一杯に息を吸い込む。悪臭の粒子が鼻腔に、咽喉にこびり付いて離れなくなりそうだと。

頭がボンヤリとして、思考に靄がかかる。考えることが億劫になつていくのを感じながら、口付けなくちやいけなにかよ

(これに……こんなモノに、口付けなくちやいけなにかよ)

怖気が走った。背筋を冷たいものが流れ、身震いしながらファリスは倒れたままのバツツを見た。頭から血を流しているが時折呻き声が聞こえる。まだ生きている、大切な仲間。自分にとって大切な、人。

(……バツツ……バツツ……う)

涙が一滴、頬を流れ、落ちた。

ミノタウロスの肉棒へ。

そのまま、涙が零れた亀頭へと震える唇を近付け、ゆっくりと、口付けていく。

(あ……俺……今、……キス、しちまった……こんな、化物の醜くて臭いチンポに……キス……)

胸が、頭が、痛む。動悸は激しくなり、朦朧とする意識は懸命にバツツと、レナとククル、亡き父やガラフへと助けを求めた。

このままでは危険だ、と何か警鐘を鳴らしている。自身の意地と誇りに懸けて大丈夫だと言いたいの、言葉が出ない。

「息が荒いな。興奮しているのではないか？」

「違……う……絶対、ちがう……」

呼吸が乱れ、吐き出された声も息もファリスにとって想定外の甘味を帯びていた。ミノタウロスの言葉を借りるなら、これではまるで雌のようだ。なのに自分の中で女の業が燃え上がり、形を成そうとしているのがわかってしまう。

「あ……はあ……く、ふう……ひう、ああ……ん、チュツ♥」

二度目の口付け。人の口程もあるミノタウロスの尿道口であるから、それはまさしく口吻そのものだった。ファリスを求めてパクパクと開閉するそこへ、無意識の内に舌が伸びる。

(なんだよ、これ……俺、今チンポ口のナカに舌、入れて……チンポと、深いキスしてる……う、あ)

自分で自分が信じられなかった。何がどうなっているのか、混乱したままの頭は用を為さず、舌先は尿道のナカにこびり付いた腐滓を刮ぐようにねっとり丹念に動き回っていた。

「お、お……いいぞ……そのまま、チンポを吸ってみろ」

言われるがままに、ファリスは丸く開けた唇で、顎が外れそうになりながら巨大な亀頭に喰らいつき、思い切り吸い上げた。その間も尿道口のナカを舌で穿るのをやめはしない。

(どうしよう……俺、自分からチンポ吸っちゃってる……)

涙が溢れて止まらない。止まらないのは涙だけでなく、口や舌の動きもだ。どうして今自分はこのように陶酔しているのかのように肉棒を吸っているのか、ファリス自身どうしてもわからないでいた。ただ、酸っぱく苦い、このこつてりと舌にまとわりつくかのような粘液と腐滓とを求めてしまっているのだけは、どうしようもなく確かで、非情な現実だった。

(臭い……チンポ……熱くて、硬いの、おっぱいに挟んで……扱いてるのだから、嫌なの……こんな、舌でチンポ穴ほじって、ナカのチンカスまで舐め取って、吸って……なんだよ、なんでこんな惨めな……惨めなコト……俺、しちやっぺんだよ……お♥)

「もつと舌を伸ばして、尿道の奥までほじるんだ……クク、先汁が出ているだろう？ 下品な音を立てて、吸い上げてみる！」

「ふぶつ、ん、んちゅう、ぢゅるる……ふむう、ンッ、ちゅぢゅ、んぷふあ……んレロ……ずぢゅぢゅ、ちゅうう……ンンッ♥」

言われるがまま、舌を思い切り伸ばし、溢れてくる苦み走った汁を舐め、それを吸る。ドロドロの、まるで半固形物のようなそれは汁と呼ぶにはあまりに粘性が高すぎた。喉に絡み付き、息が詰まる。頭が、ぼんやりとしていく。

「うつとりと、イイ顔になってきたぞ。……胸で扱くのも忘れるな？ もっと愛を込めて、チンポを扱け」

# THE MINOTAUR'S SARISA



# FINAL FAVIS FANTASY

「あ、愛……なんて……ふざけんじゃ……ひウツ!? や、な、なんだよ、コレ……? お、俺……胸……え♥ こんな、クソ汚いチンポ……挟んでるのに……嫌なの、にい……ふああ♥ なんか、おかしい……俺、おかしい……よお♥」

おかしい。おかしいはずなのに、乳房を両側から圧迫し、揉みしだく手の動きがどんどん激しくなっていく。ミノタウロスの膨張しきった獣肉棒の熱が胸に伝わり、火傷しそうだ。太い幹に浮かび上がった血脈が波打ったたび、乳肉にもその動きが伝わってくる。乳首で大きくエラの張った部分を擦り上げると、全身に電流が走り、蕩けそうになってしまう。

「んはあああ♥ ち、畜生……この、野郎……絶対、絶対に、許さね……えう、ひ……んあああ♥ んむ、ずぢゆるる、ちゅぶ、ふむう、はあ……いつ、はああん♥」

(バツツを助けるための……嫌々やってるはずなのに、なんでだよ……なんでこんな臭いチンポ……魔物の牛チンポなのに美味しいって、しゃぶって、おっぱいで挟んで扱いて……俺、なんで感じちゃってんだよお……ツ!?)

涙が止まらない。もしかしたら気付かないうちに自分は魔法でもかけられたのではないか、いや、きっとそうに違いないと思いつきたい反面、ファリスは自身気付いてもいた。

この塔では魔法は使えない。薬を盛られた覚えも無い。何より……わかってしまう。今のこの手の動きも、胸の熱も、勃起した乳首も、腐滓を求めて伸びてしまう舌も、亀頭に吸い付く唇も雄汁を飲み干そうとする喉も、全て、内側から湧き上がる自己の淫欲が為せるもの。女の業によってそうなってしまうのであると、頭のどこかで別の自分がそう囁くのだ。

(嫌ッ、嫌だ……! こんな、こんな化物のチンポで浅ましく感じて、チンポ汁吸い上げて悦ぶなんて……嫌だ……! 助けて、バツツ助けてよお……早く目を覚まして、コイツをやっつけてくれよ……バツツ……バツツ……でないと……俺……こんな、化物のクソチンポをパイズリして感じちゃう、惨めなチンポしゃぶり女にされちゃうよお……♥)

「お、お……いいぞ。そうだ、そのまま……胸で竿を圧迫し、

迫り上がってくる精液を押し出せ……くるぞ、もうすぐ……欲しいだろう? 先汁ではなく、本物の精液が!」

「ふぶううっ!? じゅぼ、ぢゆる……ふむ、ンツ、んむう♥」

管を昇ってくる極悪な粘液の塊、ミノタウロスの精液の動きが肉竿の動きから手に取るようにわかった。懸命に挟み込んだ胸の内側から押し返されてひしゃげる。いくら柔らかな部位だからといって、自分の胸がこんなにも形を変えるものだとファリスは初めて知った。その胸が、精液の上昇に合わせて柔肉を下から上へと波打たせていく。

(う、嘘ッ!? 本気、本気で射精するのかよ!? や、やだ、こんなチンポ坑に舌突っ込んで吸ってる状態でチンポ汁射精なんてされたら死ぬ、死んじゃう……! いやああああ!!)

「だ、射精すぞ全部飲み込めえ!!」

「ぐぶおおおおおおッ!?」  
目の前が爆発する。視界も頭も中も真っ白に塗り潰されるかのような感覚にファリスは一瞬意識を途絶させ、すぐさま口内を満たす獣汁の味、匂い、感触に目を覚ました。

口の中だけには到底収まらない。無遠慮に喉へと流れ込み、鼻腔を逆流して汚らしく鼻からも漏れ出ながら、ミノタウロスの射精は止まらない。呼吸が出来ず、咽せろうにもそれすら許されはしなかった。

(死ぬ!? 死ぬ死ぬ死んじやうチンポ汁でおれころされりゅふううううううううッ!?)

いつ果てるともなくミノタウロスの射精は続いた。その間、何度も意識を失っては回復し、もう腹の中も頭の中もファリスは精液で完全に満たされてしまっていた。

「千年ぶりの射精だ。さぞや濃厚で、美味かったろう」

「あぶ……お、ぼお……ほお♥ ……お、ご……ひ、ろい、こん、りやの……あふ♥ うぶ、ええ……お、おりえ……おが、ひくう……なりゆ……こわりえ、りゆ……う♥」

精液まみれで意識朦朧としているファリスを満足気に見下ろし、ミノタウロスは低く嗤いながら、ふと、思い出したかのように腕を振り上げていた。

# THE MINOTAUR'S SARISA













寒天亦現流